

嘉庫 嘉悦大学学術リポジトリ Kaetsu

University Academic Repository

エリート段階の高等教育における大学ガイドの役割

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2023-12-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宇田川, 拓雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://kaetsu.repo.nii.ac.jp/records/2000005

研究ノート

エリート段階の高等教育における大学ガイドの役割

Role of College Guides in the Elite Phase of Higher Education

宇田川 拓 雄*

Takuo UTAGAWA

<要約>

日本の高等教育進学率は1963年に15%を超えた。M.トロウ（2006）のモデルでは日本の高等教育は1960年代にエリート段階から大衆段階に入り、エリート層の特権だった高等教育は一定の資格があれば誰もが学べるものになった。大学進学には大学を選択し試験に合格しなければならず、それを支援する大学ガイドが必要となる。雑誌『蛍雪時代』は戦前から発行が続いている大学ガイドで、かつては大学を目指す地方在住の受験生にとって重要な情報源だった。蛍雪時代には大学選択や学力強化とは直接関係ない文芸投稿記事、時事問題解説、人格形成に関する随筆、学生の課外活動などを扱ったページがある。それらの記事は学生が入学後にエリートの資質の修得に適したライフスタイルに適応する準備をさせる役割を担っていた。エリート大学のエリートにふさわしい知性と人格を涵養する教育機能は大衆化によって失われたが、最近、科学技術の発展が加速し国際競争も激しくなったため、大学に卓越人材育成（エリート人材育成）の期待が寄せられるようになった。本稿では蛍雪時代が単なる受験雑誌ではなく、学生をエリートの資質の涵養に誘導する役割を持っていたことを検証し、今後の卓越人材育成の参考に供したい。

<キーワード>

トロウモデル、エリート教育、高等教育の大衆化、大学進学、大学受験、大学ガイド、『蛍雪時代』、テクニカルエリート、卓越人材、予期的社会化

1 はじめに

マーチン・トロウ（2006）の高等教育モデルによれば、高等教育システムは大学進学年齢人口の高等教育進学率が15%を超えるとエリート型から大衆型へ移行し、50%を超えるとユニバーサルアクセス型に移行する。日本では1963年に進学率が15%を超え、1980年に

* 嘉悦大学経営経済経営研究所 客員教授

50%を超えた。

本研究で論ずる「大学ガイド」とは、受験生の大学進学のご案内をするモノや人やサービスを指す。受験雑誌のような書籍の他、全国模試、予備校、家庭教師、答案添削サービスなど様々な形態のものがある。大学進学を決断、大学の選択、合格するための学力増進などを支援する大学ガイドは、若者の人生を左右する重要な役割を持っている。大学ガイドは高等教育システムの外部にあるが、実質的にシステムの一部を構成している。その意味では大学ガイドなしに日本の高等教育は成り立たない。

日本では明治以来、国是として近代化を推進するすぐれた人材、すなわちエリートの育成に努めていた。エリートには高い水準の学力が期待されており、エリートの子弟であっても無試験で入学することはできず入学試験に合格しなければならなかった。受験競争は厳しく、それを助ける大学ガイドの役割は重要であった。高等教育におけるエリート育成は大衆化の進展とともに行なわれなくなった。しかし、近年、卓越人材育成の必要性が指摘されその実現のための政策の実施が始まっている。本稿では戦前から発行されている大学ガイドである『螢雪時代』（以下、螢雪時代）の記事の分析により、それがエリート教育に果たした役割を明らかにすることを目的とする。

2 先行研究

橋本鉦市（2016）の「戦後日本における大学広告の内容分析—『螢雪時代』（昭和24～63年）を対象として—」は昭和24年（1949）から昭和63年（1985）までの40年間の螢雪時代の11月号40冊に掲載されている大学広告の文言をテキスト分析している。大学の広告・広報活動を対象として、大学がその理念、活動を社会に対して表明する戦略であるUI（ユニバーシティ・アイデンティティ）の研究である。螢雪時代の役割は広告媒体であった。

竹内洋（1991）の著書『立志・苦学・出世～受験生の社会史』は明治初期から1980年代までの大学受験にかかわる受験生の記録、受験雑誌、統計などを取り上げ、受験を社会現象として解説している歴史研究書である。その中では螢雪時代は通信添削がすぐれた受験雑誌として紹介されている。記事内容の分析はない。

竹内によれば日本の大学のエリート教育の原型は「旧制高校における教養教育」にはじまる教養主義である。教養主義は学生の哲学書、文学書、歴史書などの読書や議論により道徳的人間的価値を重視する行動規範である。教養主義による教育はトロウのいう「学生にエリートの知性と人格を身につけさせることを目的とする高等教育」に他ならない。

教養主義は本質的にエリート育成教育であり、竹内のいう学歴貴族への教育をめざすものである。その教育を大衆化した高等教育システムの中で実践し続けるのは無理があった。やがて教養主義は「虚構」（竹内）となり、1991年の大学設置基準の大綱化により大多数の国立大学に設置されていた教養部が廃止されると制度的基盤を失った。

岩永雅也（1999）は「大学のユニバーサル化とエリート教育」において、高等教育の大

衆化における「エリート教育」と「才能教育」の違いに着目している。才能教育は伝統的なエリート教育とも、特定の専門分野の知識技術を学ばせる大衆段階の高等教育、すなわちトロウのいう「テクニカルエリート」(technical elite) 育成教育とも異なる。

テクニカルエリートとは大衆化段階の高等教育を受け様々な専門分野の知識技術を学び、それぞれの専門分野でエリート職に就いた人材をさす。工学、技術から経営、経済に至る広い領域における専門職的エリートである。テクニカルエリートには伝統的エリートに期待されていた支配層の知性と人格は期待されていない。

岩永によれば才能教育は学業成績を唯一の基準とする現在のテクニカルエリート教育ではなく、人間のより広い才能を伸ばす教育である。主にアメリカで実施されている特別な才能を持った子どもを早期に見いだして特別な教育を行なう英才教育 (gifted education) に相当する。この仕組みは日本で実施されていないことから、その実現可能性については別途検討が必要である。

岩永は才能教育に言及することにより、新しいエリート教育の可能性を示唆しているが、他の筆者らのエリート型高等教育についての著作の多くは過去の時代の歴史的回顧、つまり失われてしまったものへの追悼の様相が濃い。伝統的な高等教育システムからエリート教育の要素が失われたことを竹内 (1999) は「学歴貴族の栄光と挫折」、市川 (2020) は『エリートの育成と教養教育』で「旧制高校への挽歌」と表現している。

3 問題の所在

大衆化以降、大学が増え大学間の格差がはっきりしてくると、大学入試の準備をすることは学力を強化することと同じ意味になった。現在、「知性と人格の教育」を理念に掲げている大学は少なくない。しかし偏差値重視の大学入試と大学ランキングによる大学選びが常態化している現在、どの大学がこの理念を実践しているのかについて説明を記載している大学ガイドはない。

文部科学省の「令和4年版 科学技術・イノベーション白書」は日本の研究力の低下を指摘している。また日本の技術革新力について、世界知的所有権機関 (WIPO) 発表の技術革新力を示す指数 (2022年版) によれば、日本は世界13位で先進国では低い位置にある。メディアではその理由の一つを「人材面の伸び悩み」であるとしている (日本経済新聞、2022年9月29日)。

近年は国際競争が激しくなり、科学技術が発達し続けているため、高度な専門的能力を持つエリート人材に寄せられる期待は大きい。日本ではエリートという用語は身分制社会の特権を持った支配者を想起させる。さらにエリートの倫理性の欠如やエリートの犯罪がメディアの話題になることが多く、エリートには負のイメージがある。そのためか政府はハイエンド人材、卓越人材、グローバル人材などの用語を使い、実質的にはエリート人材育成を目的とした大学政策を実施しはじめている。

その例として「グローバル人材育成戦略」（文科省 2011）がある。この戦略では「語学力、コミュニケーション能力、主体性、積極性、チャレンジ精神、協調性、柔軟性、責任感、使命感、異文化理解、日本人アイデンティティ、幅広い教養、深い専門性、課題発見能力を持った人」の育成を計画している。この人物のイメージはエリートにはほかならない。同様の企画に「卓越研究員事業」（2016）、「科学技術イノベーション創出創設事業」（2021）、「大学ファンド」（2023年審査開始）などがある。

トロウモデルでは高等教育の大衆化の次の段階はユニバーサル・アクセス段階である。今の日本はこの段階にあると思われるが、トロウの時代にはその姿ははっきりしたのではなく、トロウも詳述はしていない。トロウは2007年に亡くなっており、経済の本格的なグローバル化、ICTの発達、地球温暖化による環境の激変、さらにはコロナ禍がもたらしたオンライン授業などの高等教育に及ぼした変化への言及もない。

問題は、高等教育システムがエリート型から大衆型を経て、ユニバーサルアクセス型の時代になった現在、再びエリート人材の育成が期待されるようになったことである。その仕組みをどのように構築するかについて、現状では確かな指針は見つかっていない。エリート段階において受験生のエリート大学への入学を支援した大学ガイドの研究が現代におけるエリート育成教育のヒントになるのではないだろうか。

4 蛍雪時代と大学ガイド

4.1 大学ガイド

本稿では大学進学を支援する受験雑誌を「大学ガイド」と呼ぶ。書籍型の大学ガイドには大きく分けて3つのタイプを考えることができる。

- ①ワークブック：望みの大学に合格することをめざす学力強化のための勉強指導書
- ②ガイドブック：知らない国を旅する時の道案内のように、選択対象の大学の特徴が多样で大学の数も多い場合、その中から自分にとって最適なものを選ぶ時の案内書
- ③ランキングブック：様々な項目ごとの大学の序列の解説書

大学の種別、定員、学校数、設置理念、選抜方法、役割は時代とともに変わってきた。それに対応する形で蛍雪時代の特徴も変化している。日本は明治維新以来、高学歴人材育成を行っており、全国の秀才が大学に入学することを期待していた。受験競争では地方在住者にハンディがあった。大衆化前は有力な予備校は東京、大阪、京都などの大都市にしかなく、地方の高校は学力水準が低く、受験情報の収集もままならなかった。このような状況で蛍雪時代は地方在住の受験生にとって唯一の重要な手助けだった。蛍雪時代はどのような大学ガイドだったのかを調べてみよう。

蛍雪時代の前身は月三回発行の『受験旬報』（1932年10月、昭和7年創刊）である。1940年（昭和15年）に月刊誌となり翌1941年（昭和16年）に誌名が蛍雪時代となった。蛍雪時

代は現在（2023年）でも発行が続いている。発行された号数は1400号を超える。本研究では本研究のために収集した受験旬報と蛍雪時代のうち15冊を資料として用いてその記事を分析した。

4.2 戦前期から大衆化のはじまりの前の時期まで

1937年（昭和12年）6月下旬号の受験旬報では、科目別基礎講座、答案指導、出題傾向解説、読者の合格体験記と座談会、通信添削問題と解答解説などが主たる記事であった。全147ページの約7割が試験対策記事なので受験旬報はワークブックと言えよう。

1942年（昭和17年）6月の蛍雪時代では数学・物理入試成績の検討、基礎実力涵養講座、懸賞問題解答及び批評、成績優秀者発表などの試験対応記事が全208ページの約3割しかない。他のページは試験対策や大学案内とは直接的に関係のない、「皇国の使命に生きよ」、「南方圏と学徒の使命」、「本居宣長の古道精神」、「航空技術家を志す人に」、「新しき世界史の創造」といったタイトルの随筆や、受験生の一人旅を描いた連載小説、読者投稿欄と読者文芸欄が占めている。読者文芸欄は俳句、短歌、詩、小説、戯曲、漫画、ユーモア（小話）などからなり、その種類と量は号によってばらつきがある。文芸欄は受験旬報時代から掲載があり、ほぼ毎号4～6ページが割り当てられている。

1947年（昭和22年）5月号は戦後間もない時期の発行でありページ数は64ページしかない小冊子である。その中で試験対策ページは全64ページ中5割で、残りは随筆と読者投稿ページである。

読者による文芸作品の投稿ページは掲載が続いていたが、その内容は1958年に旺文社が主催して始まった「学芸コンクール」に移った。1960年（昭和35年）3月号には文芸欄はなくなっている。

1948年（昭和23年）には私立大学11校、公立大学1校が新制大学としてスタートした。この年の蛍雪時代6月号もページ数は64ページで小冊子である。試験対策は27ページで半分に満たず、随筆は15ページ、読者投稿は3ページある。

1952年（昭和27年）7月号は総ページ数が288ページでページ数は戦前のレベルに戻っている。読者の意見投稿欄と文芸欄は引き続き掲載されている。このころの蛍雪時代には随筆が掲載される号もあるが、いずれも大学入学や入試突破と関連のあるテーマでありワークブックとしての色合いが濃くなっている。

4.3 蛍雪時代の大量化

高等教育が大量化し、大学進学希望者が増えマーケットが広がると、全国の限られた数の読者を対象にしてきた蛍雪時代のほかに、多様な大学受験支援サービスがビジネスとして出現するようになる。1957年に旺文社が大学受験ラジオ講座を開始した。同年、難関大学の理系学部を目指す学生のための『大学への数学』誌が創刊された。これは数学のワー

クブックである。難関大学を目指す受験生向けの通信教育を行っていたZ会が1960年に法人化し全国展開を始めた。1960年代と1970年代には予備校が増えた。受験生支援のサービスが増えたことで蛍雪時代の重要性は低下した。

蛍雪時代は1967年（昭和42年）にA5判からB5判に拡大され、図表、写真などを使ったビジュアル化を進め、掲載される情報量が増え大衆化した。記事内容のほとんどは受験対策で、エリート職に関係ある記事は見当たらず、蛍雪時代は中間層学生向けのワークブックになった。この年の10月号のグラビアページのテーマは「大学のプロムナード」、11月号は「大学の詩情」で、若者が青春を楽しむ大学のイメージを振りまいている。11月号には「駒場の青春」という東京大学教養部紹介のグラビアページがある。グラビア写真で紹介されているのはエリート校のキャンパスであるが、エリート育成を思わせる記事はない。

大学進学率が50%を超えた2008年（平成20年）の3月号は右開き縦書きの雑誌から、左開き横書きの雑誌に変わっており、内容はほぼ全て試験対策にあてられている。大学紹介のグラビアページはない。2ページ分の読者投稿欄もあるがテーマは「受験生としての意気込み」や「おすすめ気分転換法」などで、いずれも試験対策記事である。この傾向は2019年（令和元年）発行の4冊（1、3、5、11月号）でも変わっていない。

大衆化が進みつつあった1990年代の半ばに、大学受験ラジオ講座が終了した（1995年）。全国一律のプログラムによる放送では大衆化による学生と大学の多様化に対応できなくなったためである。この年は蛍雪時代とはタイプの異なる大学ガイドである『大学ランキング』（朝日新聞社）が創刊された年でもある。

5 エリート育成教育の準備

5.1 読者投稿欄、随筆欄、文芸欄

蛍雪時代には学力増進や入試問題に直接関係のない随筆、投稿、読者文芸欄がある。これは他の大学ガイド、例えば『大学への数学』、『大学ランキング』、『大学の實力』（2009年創設）などには見られない特徴である。

入学試験には俳句、短歌、詩、戯曲などを創作させる出題はなく、文芸趣味は受験に直接は役立たない。俳句の席題のように、出されたテーマの俳句が採点されて合否が決まる入学試験は今でもない。現在では文芸、芸術、体育などの学力試験以外の能力による選抜は推薦入試に取り入れられているが、蛍雪時代の文芸欄は入試を意識したものではなかった。

随筆欄や毎号掲載されている巻頭言は、いずれも社会問題を取り上げつつ、人としてのあり方、人格、道徳、真理、善、平和など人間形成にかかわる話題を取り上げている。

1954年の8月号の座談会「受験時代をいかに生きるか」では大学の価値、恩人、良き友、恩師などについて国立大学学部長、国会図書館館長、評論家、旺文社社長が意見を交わしている。その内容は入学試験とは関係なく、一言で言えば人格形成論である。

蛍雪時代には「僕らの頁」という読者投稿欄があった。現役高校生による大学進学への

決意や夜学生による働きながら勉強する苦しさとそれに負けない強い進学意欲の表明などのほか、道徳、倫理、人間性、友情、愛情、平等といった普遍的な価値に関する読者の意見や読者の投稿に対するフォロー記事など掲載されている。

随筆欄、文芸欄の内容は、上述のワークブック、ガイドブック、ランキングブックのいずれにも当てはまらない。大学入試を支援する雑誌が、なぜ入試に直接関係のない文芸欄や読者投稿欄など、あるいは時事問題や人格形成論の記事の掲載を続けていたのだろうか。

大衆化までの蛍雪時代がエリート段階の大学ガイドであったことがこの疑問を解く鍵である。入試に直接役立つとは思えない記事は大学におけるエリート教育の「隠れたカリキュラム」の存在を受験生に知らせ、学力、人格ともに優れたエリートになる教育をうける準備をさせていたと考えられる。この解釈はトロウのモデルにおける「エリート段階の高等教育の役割は学生に支配階級の知性と人格を身につけさせ、エリート役割に就く準備をさせること」に一致する。

エリートの知性と人格は授業や教科書における勉学だけで身につくものではない。エリートの資質はエリートを目指す学生集団の中で課外活動などの交流を通じて習得される。学生が事前にエリートの資質について十分な知識と期待を持っていたり、エリート学生の教養やライフスタイルを身につけたりしていれば、学生集団への参加が容易になる。所属を希望する集団の価値観や行動規範を事前に学習し、その集団への適応が円滑になるようにすることを社会学では「予期的社会化」(anticipatory socialization) という。

5.2 エリートのたしなみと大衆化

エリート階層が好む種類の文化、例えば詩、短歌、俳句などの文芸や音楽、舞踊、スポーツなど技芸を好み、実作、実技ができることはエリートの資質として重要である。それらはハイカルチャー(高級文化)と呼ばれる。高等教育のエリート段階の大学でハイカルチャーがどのように扱われていたかは蛍雪時代の巻頭グラビア写真や表紙の絵画からその様子を推測できる。

1954年9月号のグラビア特集「大学生のある日ある時」には慶応大学の放送研究会と演劇研究会、東大のモーター同好会(自動車愛好会)、早大の歌舞伎研究会、東大のESS(英会話部)などの課外活動の様子が紹介されている。蛍雪時代の表紙には学生生活が描かれている。蛍雪時代の1954年(昭和29年)8月号の表紙はヨットに興じる2名の男子学生が描かれた絵画である。1956年(昭和31年)2月号の表紙では雪深い山小屋の窓から2名の男子が屋外の雪上でスキーをはいている男子を見ている。放送、演劇、自動車、歌舞伎、英会話、ヨット、スキーなどは当時の大衆には簡単には手の届かない贅沢で上級の趣味、つまりハイカルチャーであった。読者は、大学生はこのような趣味を楽しむものだと思っていたらう。ハイカルチャーを楽しむこともエリートの条件である。蛍雪時代に掲載されている在学生のレポートや卒業生の随筆によれば大学での勉学はつらいこともあるが、課外活動やスポーツなどで楽しむ機会も多く、生涯の友人もでき、学生生活は楽しく充実したものであった。

5.3 エリートの文化

ハイカルチャーはエリート階級の文化である。ハイカルチャーをたしなむことはエリートのライフスタイルの一部でありパトロンとしてその維持発展を支援することもエリートとして当然のことであった。

エリートとハイカルチャーとの親密な関係の例として、旧七帝大の合同の同窓会組織である学士会の活動がある。同窓会誌にあたる『学士会報』には最近の学術研究、時事問題についての論考の他、「会員ひろば」があり会員の投稿随筆が掲載されて、囲碁、将棋、俳句、短歌、漢詩、謡、落語、歴史探訪、ビリヤードの九つの同好会の活動紹介がある。俳句や短歌や漢詩は会員の作品が掲載されている。俳句であれば大衆層にもなじみ深いだろうが、漢詩を自ら作り楽しむには高度なレベルの素養が必要である。学士会員にはイタリアオペラ、歌舞伎、英国の劇団の演劇、ミュージカルなどの鑑賞会の案内が頻繁に行なわれている。

社会学の定義によれば、エリートは「選ばれたすぐれた人」という意味の「選良」とも呼ばれ、社会資源の独占または意思決定機能の独占にもとづく権力主体として、非エリート=大衆に優越する少数者を指す（社会学小辞典）。社会の上位層を占めるエリートは中位～下位に位置する非エリートに比べ、より多くの社会資源を所有している。「たしなみがある」ことは社会資源の一部である文化資本を所有していることを指す。学歴は制度化された文化資本にあたる。

エリートのハイカルチャーの多くは、非エリート層から見れば排他的な文化であって、取得したり実践したりするのに費用も時間もかかる。エリート教育には学生にエリートの文化資本を取得させることが重要な要素である。大衆出身者であれエリートの家系出身者であれ、エリートの資質を学び実践しそれを楽しむ文化を体験することが大学生の大学生活の重要な一部分であった。

5.4 エリートの地位の子どもへの継承

テクニカルエリート職に就いた中間層出身者が次になすべきことは、自分の地位と収入を自分の子どもに継承させることである。世襲ではない技術者、医者、エコノミスト、研究者、政治家、高級官僚、経営者、エンジニア、大企業の管理職などのテクニカルエリート層は相対的に報酬が多く、待遇が良い地位を享受している。それは英国の「一代貴族 (life peer)」に似ている。特権的待遇は一代限りで、子孫に相続させることはできない。裕福な生活を送っている親は自分の子どもに貧しい生活をさせたくない。学歴社会で、地位の継承が成功する可能性が最も大きな対策は、自分と同じレベルかそれ以上のレベルのエリート教育を子どもに受けさせることである。こうして幼少期から子どもの教育に費用と手間をかける受験文化が生まれた。現在の日本の高等教育システムは経済的に豊かな上層及び上位中間層にとっては階層的特権を家族で持ち続けることができる都合の良い仕組みと言えるだろう。このことは階層の固定化を招き、社会の流動化を阻害する。日本社会が停滞

している一因はテクニカルエリート層の子育てにあるのかも知れない。

有利な職への就職を希望するなら有利な職への就職者が多い大学、つまりランキング上位の大学をねらうのが合理的である。そのような大学では卒業生の先輩がリクルーターとして訪問し、最新の就職情報を伝えたり、教員が採用企業の人事担当者と懇意にしていたりするケースがある。このようにしてテクニカルエリート層の地位は世代間で継承されて行く。大学進学率が30%を超え、大衆層のなかでも上位中間層の子弟が大学進学するようになる、彼らを読者とするランキングブックである『大学ランキング』（1995年創刊、朝日新聞社）が登場した。

進学率はさらに上昇し大学進学率が50%を超え、中位～下位中間層が大学進学するようになる。その多くはエリート職を目指すよりも、豊かな中間層の生活の実現を求めて進学する。中レベルの中間層にとっては、学力的にも経済的にも受験戦争に参戦し、難関大学からエリート職を目指すという選択肢は現実的ではない。このタイプの学生は個人として満足できる大学生活を送り、自分にあったキャリアを歩むことを願っている。そこで自分に適した大学選びが重要になり『大学の實力』（2008年創刊、読売新聞社）のような、学生が、自分が学びたい学問や、自分がしたい仕事を捜すのを支援するガイドブックタイプの大学ガイドが出現した。

6 おわりに

高等教育のエリート段階の時代の蛍雪時代には大学入試とは直接関係ない記事が掲載されていた。それらは受験生を大学の正規のカリキュラム外にあるエリートの資質を育てる「隠れたカリキュラム」に誘導する役割を果たしていた。蛍雪時代に記事や写真が掲載されている詩、俳句、短歌、ヨット、乗馬、ビリヤード、ドライブ、スキーなどはエリートが好むハイカルチャーの一部である。そのような趣味を通じて学生はエリートのライフスタイルを身につけていった。受験生は蛍雪時代の記事を読むことにより、エリート学生のライフスタイルへの「予期的社会化」を経験し、それによってエリート大学への適応が成功しやすくなったと考えられる。

高等教育の大衆化が進むと様々な大学ガイド誌や大学受験支援サービスが現れた。蛍雪時代は編集方針が変わり、学力増進を支援するワークブック型の大学ガイドになった。大学数も学生数も増え、従来のエリート大学も多人数教育が行われるようになった。大衆段階でも一部の大学や学部ではエリート育成は続けられるが、そのエリートは学業成績競争をくぐり抜け、特定の分野の専門的知識と技能を取得したテクニカルエリートである。テクニカルエリートは、広い分野においてリーダーとなるにふさわしい高いレベルの学力、人格、知性や、豊かな人間関係、さらにハイカルチャーのたしなみも持つ人物を理想とするかつてのエリートとは異なるタイプのエリートである。

国際競争に勝てるようすぐれた独創力、研究力、想像力を持ち、社会発展のリーダーシッ

プをとる仕事はテクニカルエリートには荷が重過ぎる。我々はすぐれた道徳性と人格を持った卓越した能力の人材の育成という問題に再び直面している。これからの大学は学生が特定の学問分野の専門的知識だけでなくVR、AR、人工知能、SDGs、LGBT、温暖化、ジェンダー平等などに関する最新の知識を学ぶことができ、さらに様々な芸術、文化、スポーツを享受できる機会を提供できることが望ましい。様々な才能を持った学生が高度な学芸に親しみ切磋琢磨する環境があつてこそ、その中から卓抜した才能を持った人物が出現するのではないだろうか。

謝辞

本研究はJSPS 科研費 20K02618、JSPS 科研費 23K02558の助成を受けた。

参考文献

- [1] 市川昭午(2020)、『エリート育成と教養教育～旧制高校への挽歌』
- [2] 岩永雅也(1999)、大学のユニバーサル化とエリート教育、高等教育研究第2集、65-83
- [3] 『学士会報』、学士会、1987年(明治20年)～
- [4] 『螢雪時代』【螢雪時代:旧字体】、旺文社、1942年(昭和17年)6月号、1947年(昭和22年)5月号、1960年(昭和35年)3月号、1948年(昭和23年)6月号、1952年(昭和27年)7月号、1954年(昭和29年)8月号、1956年(昭和31年)2月号、1967年(昭和42年)10月号、1967年(昭和42年)11月号、2008年(平成20年)3月号、2019年(令和元年)1月号、2019年(令和元年)3月号、2019年(令和元年)5月号、2019年(令和元年)11月号、
- [5] 『受験旬報』、旺文社【欧文社】、1937年(昭和12年)6月下旬号
- [6] 『大学ランキング』、朝日新聞社、1995年(平成7年)～2023年(令和5年)
- [7] 『大学の實力』、読売新聞社、2009年(平成21年)～2019年(令和元年)
- [8] 竹内 洋(1991)、『立志・苦学・出世 受験生の社会史』、講談社学術文庫、2015年(再版年)
- [9] 竹内 洋(1999)、『学歴貴族の栄光と挫折』、講談社学術文庫、2011年
- [10] トロウ、M.(1976)『高学歴社会の大学』、天野郁夫、喜多村和之訳、東京大学出版会、1976年
- [11] 橋本鉦市(2016)戦後日本における大学広告の内容分析 —『螢雪時代』(昭和24～63年)を対象として—、広島大学 高等教育研究開発センター、大学論集 第48集:65-80 2023年4月1日閲覧
- [12] 文部科学省(2011)、グローバル人材育成戦略 <https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/npu/policy/04/pdf/20120604/shiryo2.pdf> 2023年4月23日閲覧
- [13] 文部科学省(2016)、卓越研究員事業、https://www.mext.go.jp/a_menu/jinzai/takuetsu/index.htm 2023年4月23日閲覧
- [14] 文部科学省(2021)、科学技術イノベーション創出に向けた大学フェロシップ創設事業 https://www.mext.go.jp/a_menu/jinzai/fellowship/index.htm 2023年4月23日閲覧
- [15] 文部科学省(2022)、大学ファンドの創設について https://www.mext.go.jp/content/20210304-mxt_gakkikan-000013198_03.pdf 2023年4月23日閲覧
- [16] Trow, Martin(1974), Problems in the Transition from Elite to Mass Higher Education, Philip Altbach, ed., International Handbook of Higher Education, The John Hopkins University Press, 2010
- [17] Trow, Martin (2006), Reflections on the Transition from Elite to Mass to Universal Access: Forms and Phases of Higher Education in Modern Societies since WWII, Philip Altbach, ed., International Handbook of Higher Education, The John Hopkins University Press, 2010

(令和5年4月24日受付、令和5年7月6日再受付)